

中学校教育現場の生徒指導における教員コンサルテーションに関する実践的検討：  
学級担任支援に焦点をあてて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芹澤, 直人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007241">https://doi.org/10.14945/00007241</a>

# 中学校教育現場の生徒指導における 教員コンサルテーションに関する実践的検討

—学級担任支援に焦点をあてて—

芹澤直人

## 1 問題意識と目的

子どもの生育環境の変化や発達障害、虐待、学習遅進の問題の発生など子どもの発達上の困難状態が多様化するとともに、対人関係をうまく築けず、集団生活が苦手な子どもが増えている。すべての子どもが苦戦状態を経験する可能性がある今日の状況にあって、学校教育現場では、問題行動を矯正するだけの指導では対応できなくなっているのが現状である。また、個々の教師が様々な生徒指導上の課題を抱え込んで行き詰っている状況や、保護者への対応に苦慮しているケースも見られる。

このような状況を改善するためには、教員個々の対応から組織としての対応への転換が必要であろう。組織的に対応することで、幅広い児童生徒理解につながり、その結果、子どもの苦戦状態を教師がより正確に捉え、子どもに寄り添った指導を可能にすると考えられる。現在のところ学校教育現場では、問題や困難を抱えた児童生徒に対する支援は、まずは学級担任による個別支援から始まると言ってよい。しかしながら、学級担任による個別支援はうまくいくこともあるであろうが、成果が得られないばかりか失敗に終わることもある。その原因の一つは、問題の理解や対応が担任—児童生徒の二者関係の中に限定されてしまうところにあると考えられる。二者関係では担任以外のメンバーが関わりにくく、その結果として第三者の介入が容易ではなくなって、閉鎖的な関係に陥りやすい。とりわけ担任—児童生徒間の関係がこじれたり、第三者からの適切な支援を受ける機会を逃してしまうと、児童生徒が抱える困難が一層進んでしまう場合も起こりうる。このような場合には、早急に何らかの対応策を講ずることが必要となり、多くの場合、生徒指導主事や管理職が担任を支える組織としての体制をつくることになる（図1）。

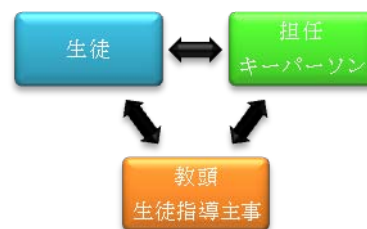


図1 第三者の介入

学校教育現場では、このような組織による支援が十分に機能しているとは言い難いのが現状である。形式的には生徒指導関係の委員会が組織化されていたとしても、一部の教員だけの意見交換の場となっていたり、役割分担をすることでかえって子どもへの関わりが希薄になったりというように、いくつかの問題点が存在している。このような現状からも、学校教育現場では、苦戦している児童生徒への支援が的確に機能するような手立てを工夫することが求められている。

生徒指導体制が機能するとは言っても、各学校が置かれた状況によってその有効な方法は多様である。中でも、児童生徒の現れや課題を把握した上で、どのような生徒像を目標とするのか、全教職員の協力体制をどのように作り上げるか、困難を抱えた児童生徒への対応に苦慮する担任をどのように支えるのかなど、生徒指導体制を機能させる上で管理職が果たす役割はとても重要

である。中でも、教職員に対する身近な相談役を務めることが多い中学校教頭職に着目して、生徒指導に関する教職員に対する支援の様子の実際を知ることには大きな意義があると考えられる。

本研究では、教頭による職員への指導支援役割の一つとして、困難を抱える受け持ち生徒に対する学級担任の二者間の関わりに教頭が関与する仕組みが動いている中学校で、教頭による学級担任、生徒及び学級担任－生徒の二者関係への関与の様子を継続的に観察することとした。学級担任と苦戦状態にある生徒との二者関係に第三者的な立場にある教頭がどのような関わりをしているのかを、直接の観察及び面接を行うことで明らかにし、担任－生徒関係に及ぼす第三者的役割の意味や特徴を見いだすことをねらいとした。なお、本研究である中学校の教頭に着目した理由は次の通りである。

①職員のマネジメントをする立ち位置にいる

②適応指導教室での勤務経験を持ち、教育相談の専門性を兼ね備えている

本研究では、生徒指導支援場面における教頭職の関わり方を追求しながら、次の2点を目的として、検証・実践を進めていくこととした。

①行動観察や面接を通して、具体的な関わり背後にある教頭職の考え、価値観は何かを明らかにする。

②教頭の支援的関わり背景にある信念・考え方や思いなどを手がかりとして、応用的な実践に取り組む。

## 2 生徒指導支援に関する教頭の「思い」－A中学校での事例から－

本研究を進めるにあたって、教頭への面接と日常での行動観察を繰り返すことで、教頭の生徒指導や教職員支援に対する考え方や気持ちを明確にして行くこととする。ここで「思い」という用語を使った理由は、生徒指導や教職員支援に対する価値観・考え方といった認知的側面だけではなく、教職員に対する人としての思いや人間関係の面など感情的要素も重視する必要があると考えたためである。

### (1) A中学校における面接と行動観察の概要

A中学校は公立中学校であり、各学年5学級、特別支援学級を併設している。静岡駅に近い町中にあり、各種研修指定を受けた実績が豊富な中学校である。対象とした男性教頭は、教職歴34年でA中学校での在籍は2年目である。以前、教育委員会の適応指導教室でカウンセラーをした経歴をもつ。前任校での教頭経験を経て2度目の中学校勤務となる。

教頭の生徒指導に対する「思い」を分析するための視点として、あらかじめ、①教員に対しての関わり、②子どもに対しての関わり、③学校づくりと外部機関に対しての関わりの3つの視点を設定した。

面接は、放課後に5回実施し、全体として教頭個人のまとまりのある信念を確かめようとした。また行動観察は実習の時間の昼休みに、職員室での観察を中心に行った。分析の視点として、学級担任に対する①声かけ、②指示・指導、③その他・日常会話の3つの関わりの様式に注目することとした。

### (2) 分析の方法 ー面接と行動観察の記録のカテゴリー化ー

上記のように、複数にわたる面接や行動観察を通して、幅広い視点から多くの情報や逐語録を

収集することができた。これらを利用して、下記のような手順でカテゴリー化を行った。

(手順1) 行動観察や面接から得た情報を文意の重複を避けて整理し、それぞれの要点を短い文章にしたところ、102個の記述が得られた。それらを、「対教員」、「対子ども」及び「対外部機関・学校」の3つの対象ごとに分類した。

(手順2) これらの文章について、内容が類似している観点で分類し、大学院の教授と院生の話し合いのもとで一致するまで議論を重ね、カテゴリーの名を作成した。

(手順3) 作成したカテゴリーから、A中学校の教頭における第三者の役割について考察する。

### (3) 行動観察・面接記録の分析

教員に対する見方・とらえ方の内容を分類したところ、生徒指導のあるべき姿に関する担任を中心とする一般職員への支援は、「現場主義」、「環境整備」及び「具体的な支援方法・スキル」という3つのカテゴリーから

Table 1 教員に関する記述の分類結果

なることが示唆された。また、生徒指導という枠組みを超えて、担任という役割に関する見解や、教頭と一般職員との関係についての見解、生徒指導の組織・体制についての考え方に関するカテゴリーも見られた (Table 1)。子どもに対する見方・とらえ方の内容を分類したところ、子どもに関する発言は、「生徒指導観」、「子ども理解の在り方」及び「生徒指導上の諸問題への対応に関する考え方」の3つのカテゴリーに分類された。外部機関、学校づくりに対する見方・とらえ方の内容を分類したところ、「生徒指導上の諸問題のとらえ方」、「職場づくり」、「保護者関係」及び「教頭の役割」の4つのカテゴリーに分類された。

カテゴリー	代表的な記述
現場主義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導では、あくまでも担任を主体にする。</li> <li>・その人らしいやり方がいい方法である。</li> <li>・「ここまで順調だといふ要求しちゃうんだよね、いろいろなことを」と担任に声をかけた。</li> </ul>
担任支援のための環境整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の関わりを深めるためにケース会議を開く。</li> <li>・「今度の学年部会でC君のことを話題にしたらどうか」と提案した。</li> </ul>
担任支援の具体的方法・スキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まずは担任の気持ちを聞きたい。</li> <li>・いつでもストレートに伝える準備をしている。</li> <li>・本人がその気になるように語り掛ける。</li> <li>・担任からの報告はうれしい、だからすぐ声をかける。</li> <li>・「昼休みには、みんなと元気に過ごしてよ」と様子を伝えた。</li> </ul>
担任という役割についてのとらえ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒や保護者との太いパイプをもつのは担任である。</li> <li>・不登校のきっかけは教員が作るかもしれない。</li> <li>・相談員からの苦情、お願いには正しい見方ではあるが、全部はいえない。 ・フットワークが一番大事である。</li> </ul>
教頭としての職員への働きかけに関する考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任を支える体制は役割を意識した立ち位置をとる。</li> <li>・学年がうまくいかないときは、外からの修正が必要となる。</li> <li>・生徒指導が機能する環境をつくるためにアンテナを高くしている。</li> <li>・自分の行動の判断は、相手にゆだねる。</li> <li>・「細心の注意を払ってください」と全体へ投げかける。</li> </ul>
生徒指導組織論	<ul style="list-style-type: none"> <li>・組織として、担当を飛び越えてまでやらない。</li> <li>・校長を理解することで組織への指示がスムーズに出せる。</li> <li>・2回目のケース会議で指導が深まる。</li> </ul>

これら各カテゴリーに一貫して見られる教頭の基本的な考え方は、①「目に見えない支援こそが大切である」、②「担任－生徒という二者関係に、第

三者として関わる教頭としての立ち位置が重要である」、という表現に集約される。

「目に見えない支援」とは、直接的な支援行動（指示、助言、まちがいを正す、・・・）はむしろ少なく、一見目立った学級担任支援を特別にはしていないように見えて、その実、間接的に学級担任の子ども支援活動を支えるような行動をとることを意味する。例えば、ある学級担任が抱えている苦戦状態にある子どもにどう対応するかを生徒指導関係の委員会の正式な議題として取り上げるなど、学級担任による受け持ち生徒への支援をより取り組みやすくするような条件整備・環境調整のための行動である。教頭による「目に見えない支援」は、以下のように担任の支援活動をより望ましい方向に変化させていくことを可能にする。

①担任による「無理のない個別支援活動」、すなわち特別な形で時間やエネルギーを消費しなくても済み、少しの努力と工夫で気軽に実行できる具体的な支援活動を支えることになる。

（例1）学級担任による対象生徒へのファックス連絡や母親との定期的メール交換：子どもや保護者とのつながりを維持するとともに、定期的な連絡を継続することで、子どもの安心感を生む。母親にとっても、学校とのつながりを保つことができる。

（例2）家庭訪問を外部支援者に委ねる：報告を後で求めることで、多忙な学級担任にとっての負担を減らすことができる。

②個別支援への負荷が少なく済み、その分一般生徒への気配りができる。

また、「目に見えない支援」が有効に機能するためには、以下のことが重要である。

①集団で補い合うことのできるチーム支援体制が確立していること。

②生徒指導や教育相談活動の中での「教師ができる」支援の内容を明確にすること。

このような「目に見えない支援」が有効に機能するための条件が整っていれば、学校教育現場において組織的な生徒指導・教育相談活動を推進に向けて展望を切り開くことができる。例えば、「中学校教育現場では、生徒指導のスペシャリストがいなければうまく行かない」という支配的な考え方が根強く残っているが、学校全体がスペシャリストに頼り切ることによって問題を抱える子どもとの関係を希薄にしまったり、学校によっては生徒指導主事が学級担任を兼務することで過重な負担を生徒指導主事に強いることになるなど、こうした考え方は実際には望ましい生徒指導・教育相談体制を表現しているわけではない。それに対して、「目に見えない支援」が機能しているならば、教員一人ひとりが自分のできる範囲で子ども支援活動に取り組むことを学校組織が支えることを意味することになる。

また、第三者的立場とは、二者間の関係のこじれや閉鎖的關係を二者関係の外部から客観的な視点に基づいて調整を図る立ち位置を意味する。第三者からの指摘や助言が、当事者同士の関係であるからこそ生ずる狭い視野を広げ、当事者とは異なる視点から事態の再解釈を進めるのに有効に働く。

### 3 「目に見えない支援」と「第三者的立場」を活用した学級担任支援の試行的実践

教頭の行動観察及び面接によって得られた学級担任支援のキーポイントに基づいて、不登校生徒への対応に苦しんでいる学級担任を実際に試行的に支援した。自らがA中学校教頭と同じような学級担任支援をシミュレーションとして取り組むことで、学級担任支援を効果的に進めるためのキーポイント（「目に見えない支援」と「第三者的立場」）がどの程度現実的に有効であるのか

を検証することができる考えたためである。すなわち、A中学校教頭と学級担任という個別特殊な関係にとどまることなく、より一般的な同僚教員（先輩教員－後輩教員）での関係にも適用できるかどうかのモデルケースとすることをねらいとした。なお、筆者は現職教員であるとは言え、A中学校では実習生という立場であることから、A中学校教頭と同一の指導的役割をA中学校の学級担任にとることはできないために、とくに「第三者的立場」からの関わりを重視した。

対象とした学級担任は、教職歴は16年で、A中学校での勤務歴は4年の、42歳の男性である。期間は2010年6月からの6ヶ月間で、担任との面談や意見交換を行った。

「第三者的立場」の効果、すなわち担任の変化は、「抵抗感の緩和」、「共同歩調」及び「周りの介入」の3点に現れていると考えられる。

「抵抗感の緩和」について考えてみると、年齢から見て年下で経験量も少ない後輩教員からの支援に対して当初は抵抗感を持ち、また周囲の教員から“苦戦している生徒をひとりで抱え込む”といった無言の圧力によって、他の教員や外部専門家からの助言を求めるといった“外との交流”機会がほとんどない状況であった。筆者が第三者として担任に関わる回数が増すにつれて、次第に筆者と担任との関係が“親密”な状態へと変化していった。その背景には、①インフォーマルな対話機会を設けたこと、②情報の蓄積により支援対象生徒の理解が進んだこと、及び③肯定的な受け答えを心がけたことの3点の継続が、学級担任の意欲や前向きな気持ちを引き出し、筆者に対する信頼感を伸ばすことに役立っていたことを指摘することができる。

また、家庭訪問や電話の連絡、母親のメールとあらゆる手段がふさがれて何も手が打てない状況にあり、担任が一番苦しんでいる時期に筆者が関わったことによって、2人で共有可能な目標が設定され、相互に協力しながら事態の改善に取り組んだこと、すなわち「共同歩調」を確立したことが、担任－子ども関係の変化に結びついていた。例えば、学級担任への母からのメールが筆者に転送されるようにするなど、同一歩調で、それぞれができることを一緒に取り組もうとしたことが有効であったと判断される。

「周りの介入」とは、第三者の立場の人を増やしたということである。学校には、学級担任を支えている人的資源が豊富にある。その人的資源をつなぐことを継続的に行った結果、間接的な関わりなどいろいろな形で、学級担任を支えることがA中学校の中に広がった。ケース会議やケースネット会議に限らず、日常的な介入が増えることで、学級担任が、自らの生徒支援行動が間違っていないかという正当性の感覚や自己信頼感、自分はこれでよかったという安心感を獲得することにつながったと解釈できる。

#### 4 第三者的立場からの学級担任支援 －B中学校の実践から－

実習校での体験に基づいて、異なる生徒指導文化を持った別の地域の公立中学校においても、教頭職や年長の教員による学級担任支援が有効に実施できるのかどうか、あるいはA中学校で得た「目に見えない支援」や「第三者的立場からの関わり」が学級担任支援に有効に機能するのかどうかを確認するために、所在地域や学校環境が異なるB中学校において、経験の少ない学級担任に対する年長教師という立ち位置で応用的な実践を企画実施することとした。

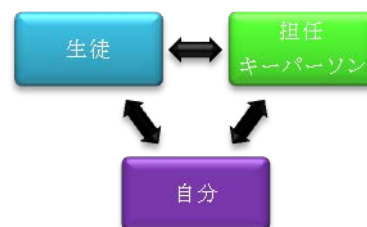


図2 B中学校での立ち位置

実習校であるB中学校は、公立中学校であり、各学年4～5学級、特別支援学級を併設している。静岡県東部の小都市にあり、近辺は第一次産業中心ののどかな田園地帯である。

対象とした男性教員は、教職歴1年目の28歳であり、2年間の講師経験を経て、B中学校の新規採用教員として4月より赴任した。現在は、1年生の担任である。支援の方法は、2010年9月以降の実習日に関与観察と面接を中心に行った。

B中学校で初めての学級担任となった若手教員は、いろいろな場面で苦戦をしていくことがあると思われる。問題は、生徒と個人との1対1の関係のみならず、学級と教師といった場面でも生じていることが想定される。それらの教師と生徒（個人及び学級集団）間の関係を第三者的な立場から看取することで若手教員を支援することとした。

B中学校における学級担任支援のポイントは、下記のものであった。

- ①子どもに対する肯定的な見方をすることが、子どもへの働きかけ方を変化させること（リフレーム効果）
- ②別の角度から見ることを促し、例外をさがしてみる（関係性の転換）
- ③教師が自分の指導を内省できるようにすること（ななめの関係）
- ④自分のとらえをさらに客観的に見る機会を提供すること（認知の振り返り）

さらに、これらの学級担任支援の方向性を根底で支えるのは、支援する側の「学級担任の活躍を引き出す」という姿勢である。すなわち、学級担任との人間関係をつなぎ、学級担任の気持ちを無視した介入はせず、学級担任が何を必要としているのかを考えて、常に担任が持つ力を発揮できるような関わり方を継続することが重要である。そのことを前提として、学級担任が子どもの問題に向き合うことが可能となるように、学級担任に対する肯定的な見方を持続させ、その中で学級担任の自己決定を尊重することが大切であろう。

## 5 今後に向けて

今年度のA中学校での実習は、不登校の生徒への関わりが主であった。昨年度の小学校での実習のときから知っている子どもへの支援を継続して行い、多くの場面で意味ある活動になったと思われる。家庭訪問や教員との情報交換、外部機関との連携など、いろいろな人材とチームを組んで進めてきた。それを可能にしたのはA中学校の教頭であり、そんな教頭に魅力を筆者は感じていくこととなったのである。2つの事例を通して、A中学校で得た「目に見えない支援」や「第三者的立場からの関わり」が学級担任支援に有効に機能するのかどうかを確認することができた。

教員コンサルテーションが、現場の状況を肯定的にし、子どもに対しても前向きな対応ができることはわかった。今後は、第三者的な立場が日常的にできる体制作りが今後は必要となると思われる。それは、「目に見えない支援」を通して、教員がそれぞれの持ち味を出せる環境をつくっていくことである。第三者として、常に誰をつなぐのかと考えることになる。例えば、担任の場合には、家族や友達をつなぐことが考えられ、どんな情報を流すのかでもつながると考える。学年主任や生徒指導主事といった立場をもらうことは、より黒子として学級担任に花を持たせる立場をとることになるのだろう。時には、第三者的な立場が見つからずに、二者関係を深めることを必要とする場面もでてくるかもしれない。しかし、ミドルリーダーとしては、日々の中でできることを積み上げて、今後も多くの子どもを支える実践をしていきたいと考えている。